

令和7年度がん教育等外部講師連携支援事業 がん教育推進校実践報告

金沢市立朝霧台小学校

学級数：20学級 児童数：562人

【テーマ】

がんに対する正しい知識や理解を習得するとともに、がんという病気を自分事として捉え、生涯にわたって学んだ事を実践していこうとする態度や意欲を育む。

1 はじめに

授業を始めるにあたり、本学級の児童に対してアンケートを行った。その結果、ほとんどの児童は「がんは誰もがかかる可能性のある病気である」を正しいと回答したり、「体の調子が良い場合は、定期的に検診を受けなくても良い」を誤りと回答したりするなど、がんは誰でもかかりうる病気であり、検診が大切だと理解していた。

一方、「自分はがんにかかると思う」の質問には、「そう思う」「ややそう思う」と回答した児童が約半数いた。

これらの結果から、がんについての知識はある程度持っているが、自分とは関係ない話であるという感覚を持っており、興味・関心が低いという実態がうかがえた。

しかし、今やがんは日本人の2人に1人はかかる病であり、特に10～14歳の児童の死因の第1位が「がん」によるものである。このことから、決してがんは6年生にとっても人ごとでは済まされないと分かる。

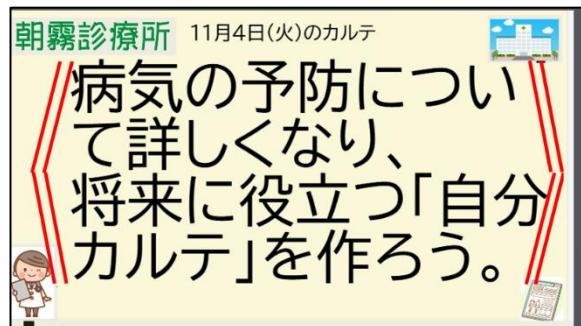
そこで、このがん教育を実施するにあたり、6年体育科保健領域「病気の予防」の単元と関連し、がんを始めとした様々な病気を「自分事」として捉え、学んだ知識を実生活に生かしていこうとする態度や意欲を育むことをねらい、授業実践を行った。

2 実践

(1) 病気を自分事として捉えようとする、ストーリー性のある単元構成の工夫

単元の導入で、知っている病気について出し合ったり、病気にかかるとどうなるかを話し合った。その上で、最新の日本人の死因のグラフを読み取らせたところ、がん、心疾患、脳卒中などの疾病が死因の約半数を占め、他の病気も含めると大多数の人が病気で亡くなっていること、年間出生数の約2倍が1年間で亡くなっていることに児童は驚いていた。

そこで、「この単元で病気のことをしっかりと学び、将来に役立てていこう」という共通理解のもと、「朝霧診療所」と名付けて教室全体を診療所に見立て、児童全員が医療スタッフとなり、病気の原因を調べたり予防策を考えるという授業展開を行った。



具体的には、司書教諭の協力のもと、がんや病気に関する図書資料を用意してもらい、教室に展示したり、教室の入り口のドアに「朝霧診療所」のポスターを掲示した。また、毎時間の授業の初めに、病気にかかった方のインタビューや映像資料を提示し、それをもとに「カンファレンスタイム」と称し、医療スタッフのごとくグループで話し合い、予防法や解決策を考えるという形をとった。

また、授業で学んだことを将来に役立てるように、授業の最後に「自分カルテ」として実生活に生かせることをふり返らせた。これにより、常に「自分事」として病気に向き合う姿勢を継続させた。

(2) がん経験者とのT・Tによる授業

「自分や身近な人ががんになった時にどうしたらよいのか」をより自分事として捉えていくために、30代で乳がんを経験され、現在臀部に転移があるものの精力的に活動されている50代女性の外部講師をゲストティーチャーに招き、T・Tによる授業を行った。

前時でがんの実態を学び、特にがんの半数以上は原因不明であり、かかるかからないかは「運」もあることを知った児童の中には、「ちょっと怖くなってきた」「自分もいつがんになってもおかしくないかも」といった感想が聞かれ、ぜひ経験者の方にいろいろと聞いてみたいという思いを持って、本時を迎えた。

児童のがんに対するイメージ（キーワード集計）



最初に講師の方の経歴を紹介した後、いつものように「カンファレンスタイム」の形をとり、グループで質問したいことを考えた。そして、話し合ったことを順番に出し合い、以下の4つの視点で板書にまとめた後、教師とゲストティーチャーのトーク形式で、児童の質問に答えていくという形をとった。

- ①がんになったときの気持ち
 - ②がんになった時の身体的な変化
 - ③治療方法や、その時の心理的・身体的变化
 - ④日常生活への影響（お金・家庭・仕事）

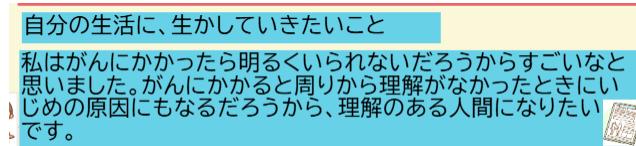
講師の方の「がんになったときはショックで、家族に伝える時はボロボロ泣いていた」という話や、「治療の影響で髪の毛が抜けたり、胸を切除したりして見た目が変化した」という話は真に迫るものであり、児童も真剣に聞き入っていた。また当時、自身の子どもは小学校6年生と3年生であったが、がんの告白を黙って聞いてくれたという話は、児童も共感を持って聞いていた。

しかし、がんになったことで、職場や家族などの周りの人々が温かく接してくれたり、

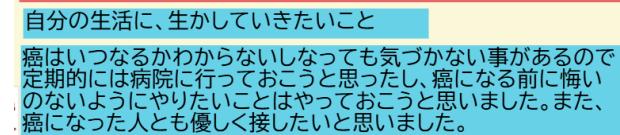
がんになったことで料理教室の先生になることができたという話もあり、希望につながるような一面も聞くことができた。

(3) 児童の感想

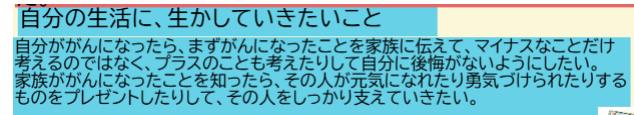
児童Aの感想



児童Bの感想



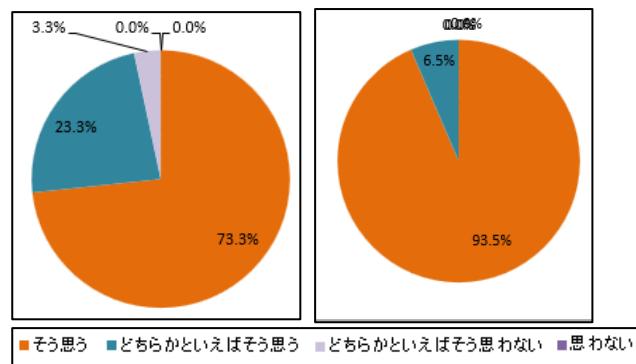
児童Cの感想



3 児童アンケートの結果

①がんの学習は健康な生活を送る上で重要だ。

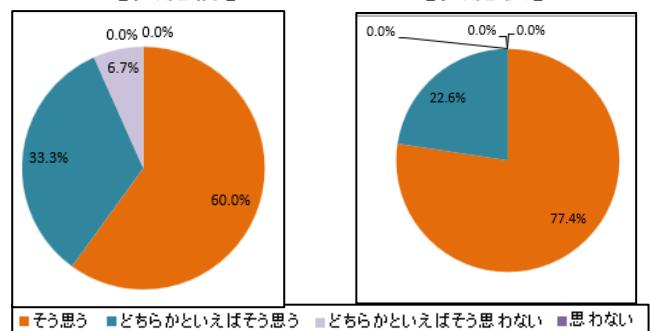
【実施前】



【実施後】

③がん検診を受けられる年齢になったら、検診を受けようと思う。

【実施前】



【実施後】

これらのアンケート結果より、授業実施前に比べ、がんの学習が自分にとって大切であり、実生活に役立つという気持ちの醸成や、実際に検診を受けようという実践意欲の向上を図ることができた。

4 実践の成果と課題

○○成果○○

今回、「朝霧診療所」と銘打ち、病気の予防や治療を自分事として捉えるために、ストーリー性のある一貫した取り組みを行った。回を重ねる毎に、授業で分かった事を「自分カルテ」に書き留め、学びが蓄積されていることが目に見えて分かるため、毎回の授業を楽しみにしている児童が多く見られた。

さらに、外部講師の活用により、実体験に基づいた話を聞くことで、教科書や図書資料では得ることができなかった「がんになっても前向きに生きることができる」という思いに触れ、希望を持って授業を終えることができたことが、最大の成果である。

◆◆課題◆◆

単元の最後に、これまで記入してきた「自分カルテ」を印刷し、冊子にして児童に渡した。自分が作り上げた冊子に児童は喜んでいたが、今後この学びを生きたものとするには、まずは生活習慣や食育などの観点から、定期的に自分の健康を見つめ直す機会を作る必要があると感じた。また、外部講師の活用はとても有意義であったため、学校のカリキュラムに位置づけ、取り組んでいきたいと感じた。

【実施前】

【実施後】

